

パソコン用インタフェースボード

吉尾智誓*
都築貴之*

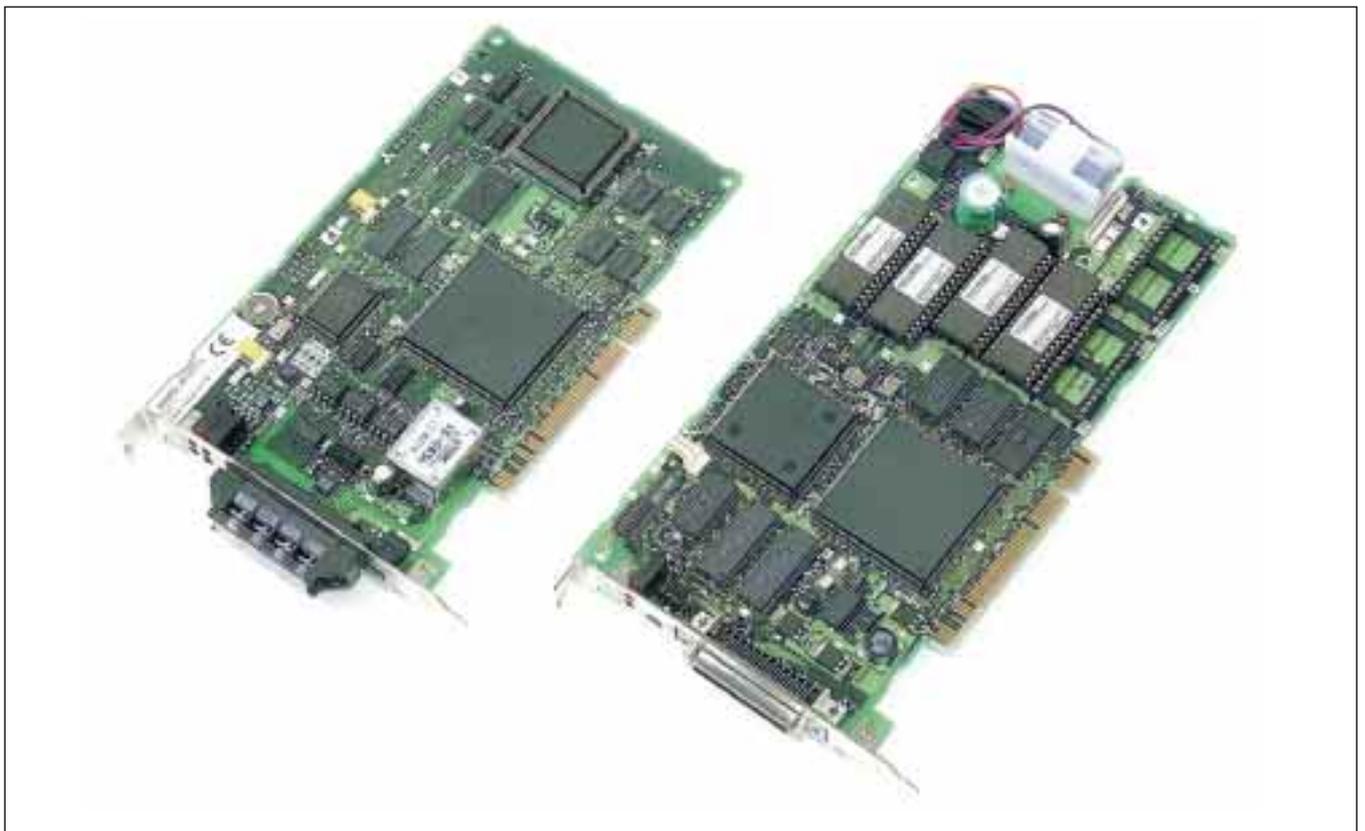
要 旨

FA分野へのオープン化の波が高まりつつある現在、FAシステムにパソコンを使用したいというユーザーニーズが強くなってきている。それに伴い、パソコン用インタフェースボードに対する需要も高まりつつある。これらの需要にこたえるため、1996年に、三菱電機のコントローラネットワークであるMELSECNET()、MELSECNET / 10に対応したパソコン用インタフェースボードを発売した。

その後、パソコンの進化とともに、インタフェースボード技術についてもその向上が図られてきた。ハードウェア面ではISAバスからPCIバスへ移行するに従い、データ転

送速度の向上や回路の集積化、RASの強化などが図られてきた。またソフトウェア面では、OSの高機能化に伴い、インタフェースボード検出の容易化、通信ソフトウェアライブラリの共通化によるユーザーインタフェースの向上などが図られてきた。そして現在では、8種類のパソコン用インタフェースボードを品ぞろえしている。

本稿では、パソコン用インタフェースボードの開発背景、ボード技術の推移をハードウェア面とソフトウェア面から説明した後、現状の当社のパソコン用インタフェースボードに取り入れられている技術について述べる。



パソコン用インタフェースボードの外観

上記写真は、マスタ局対応CC-Linkボード“ A80BD-J61BT11”(左)とシーケンサCPUボード“ A80BD-A2USH-S1”(右)の外観である。この二つのボードはPCIバス対応ボードであり、この対応により、信頼性及びデータ転送速度の高速性を図っている。